

# 北条氏規家臣南条因幡守と南条氏一族

浅 倉 直 美

## はじめに

小田原北条氏の研究において、一門および本城家臣については論考も多く、とくに一九八〇年代以降、自治体史の編さんが進められるとともに、大いに研究が進展した分野である。しかしながら、一門の家臣については、さらに追究されるべき点も多く残されている。そこで、本稿では、北条氏規（四代北条氏政弟）の政権を支えた筆頭家老の南条因幡守昌治について、その系譜と動向について詳述していきたい。

南条昌治については、一九九一年に黒田基樹氏が、氏規発給文書を分析するなかで論じられたほか、二〇〇六年刊行の『戦国人名辞典』において立項され（石塚勝氏執筆<sup>2)</sup>）、さらに二〇一二年に、『新横須賀市史 通史編』（真鍋淳哉氏執筆<sup>3)</sup>）において概略が紹介されている<sup>4)</sup>。

1  
南条氏の本貫地は、伊豆の南条郷（伊豆の国市南條）とみられ、北条家臣の南条氏としては、因幡守昌治のほか、山城守長吉・右京亮綱長・飛騨入道・四郎左衛門尉・民部丞などが確認される。いずれも親族関係にあったと推測されるが、因幡守関係の文書が二〇点余り、四郎左衛門尉が氏康側近として十数点の文書に登場するほかは、ごく限られた史料に確認されるのみであり、南条氏の系譜は、これまで詳しく検討されてはいない。南条因幡守と見える場合

も、全てが昌治に比定されるわけではなく、因幡守の受領名を継承した昌治の嫡男と捉えるべきものもあると考えられる。そこで、昌治を中心に、南条氏一族それぞれの活動の時期から、おおよその年齢を考察し、系譜関係を推定したうえで、検討を加えたい。

## 一 北条家臣南条氏一族

まず、北条家臣南条氏の関係文書三六点を年代順に【表1 南条氏関係文書】として示した。なお、南条因幡守関係文書は、別に【表3 南条因幡守関係文書】を示すので表3 No. 1・2・10のみ表1に加え、ほかは省略した。

### (1) 山城守家の長吉・綱長

南条氏一族としての初見は、永正六年（一五〇九）十一月二十六日伊豆大宮神社の棟札銘「南条山城守長吉」である（表1 No. 1）。同社は、「延喜式神明帳」に見える古社で、現在の伊豆市上白岩に所在し、南条氏の本貫とみられる南条郷から南東方向に直線距離で約六キロ、南条郷の西を流れる狩野川から支流の大見川を遡ると一三キロ余である。

その三十四年後の天文十二年（一五四三）三月十五日、同じく伊豆大宮神社の棟札銘に「平朝臣南条右京亮綱長<sup>(長)</sup>」と見え、山城守長吉の後継者が右京亮綱長であったことが分かる（表1 No. 3）。綱長の実名は、氏綱の偏諱を受けたものと判断される。仮名（不明）を改めて右京亮を称しているので、綱長は天文十二年に二〇代後半になっていたと推定されるが、山城守を称していた長吉が三十四年前の永正六年に四〇代になっていたとすると、その年齢差から長

吉と綱長の間に、もう一代あったと考えられ、綱長は長吉の孫にあたると想定される。この右京亮―山城守を称した山城守家が南条氏一族の本家で、綱長の活躍期は天文年間―天正年間初期であったとみられ、天文五年、氏綱・氏康・為昌による鶴岡神宮造営状況見参に、大道寺氏・遠山氏等とともに相伴した南条(表1 No. 2)、永禄年間(一五五八―一五七〇)に鯛三枚の納入を命じている北条家朱印状の奉者南条(同 No. 10)、鎌倉への代官として参上する南条(同 No. 15)も、右京亮綱長であったとみなされる。綱長は、元亀元年に山城守(同 No. 21)、天正七年に山城入道(同 No. 31)を称していて、この間に入道して、嫡男の右京亮に家督を譲ったとみられる。受領名を称している元亀元年には四〇代後半から五〇歳くらいであることから、生年は大永年間(一五二一―一五二八)後半頃と推測される。永禄二年(一五五九)成立の「小田原衆所領役帳」(以下、『役帳』と略す)に見える南条氏は、小田原衆の南条右京亮(表1 No. 6)と、本光院殿衆の南条玄蕃助(同 No. 7)の二人である。右京亮は綱長とみなされる。知行高合計は、右京亮綱長が四〇五貫一五〇文、玄蕃助が一三三貫三八六文で、知行高の大きな差からも、右京亮の系統(山城守家)が本家筋であったことが明らかである。

山城守家の綱長の知行について、『役帳』には次のように見える。

一 南条右京亮

八十壹貫九百文 西郡 宮地 丙寅検地辻

此内廿三貫三百文 有物

貳百拾貫文 中郡 堀三保

五拾三貫六百文 中郡 温水 寅歳検地辻

此内卅貫六百文 壬寅検地増分

四拾四貫六百五拾文 同 東田原

内容・事項	出典	
藤原朝臣南条 <b>山城守</b> 長吉	大神宮所蔵	戦北 4601
大道寺藏人・桑原・南条・遠山ほか 氏綱父子三人見参に相伴	快元僧都記	戦北補遺 137 頁
平朝臣南条 <b>右京亮</b> 綱良(長)	大神宮所蔵	戦北 4628
御ふせ五十疋 南条玄蕃助殿	岩本院文書	横須賀 2343
相州吉浜谷本村大壇那南条殿	新編相模国風土記稿	戦北 362
合計 405 貫 150 文 南条 <b>右京亮</b>	小田原衆所領役帳	役帳 5~6 頁
合計 133 貫 380 文 南条 <b>玄蕃助</b>	小田原衆所領役帳	役帳 175 頁
相州土肥谷本村大壇那南条民部丞殿	新編相模国風土記稿	戦北 655
南条飛驒入道(花押)	妙国寺文書	戦北 663
奉者 南条 鯛三枚南条代・大草代ニ渡すべし	箱根町所蔵文書	戦北 689
奉者 南条 <b>四郎左衛門</b> 武蔵金曾木郷諸役免除	鷺宮神社	戦北 757
奉者 南条 <b>四郎左衛門</b> 渡辺孫七郎の召仕陣夫替につき	渡辺神社	戦北 810
奉者 南条民部丞 修善寺番匠公方役	修善寺文書	小田原Ⅱ 581
船奉行南条 <b>彦七郎</b> あて	井原文書	戦北 1019
鎌倉へ南条参上あるべく候	伊藤長太郎氏所蔵文書	戦北 4900
南条・幸田申す如く公用 土肥御屋敷うしろの山石切取り	青木文書	戦北 1094
南条 <b>四郎左衛門</b> ・幸田申す如く 石切七人土肥へ派遣のこと	青木文書	戦北 1099
奉者 南条 <b>四郎左衛門尉</b> 駿河駿東郡宝持院制札	宝持院文書	戦北 1156
南条 <b>四郎左衛門</b> あて 懸川無事落着氏康に披露のこと	古今消息集十	戦北 1219
奉者 南条 <b>四郎左衛門</b> ・幸田与三 徳寿軒・鑑西堂の相論につき	北条寺文書	戦北 1306
奉者 南条 <b>山城</b> 番匠集召寄当年御番細工	相州文書所収	戦北 1401

表 1 南条氏関係文書

No.		年・月・日	西暦	文書名
1	長吉	永正 6・11・26	1509	大宮大明神棟札銘
2	綱長	天文 5・9・9	1540	快元僧都記
3	綱長	天文 12・3・15	1543	大宮大明神棟札銘写
4	昌治	天文 13・⑪・23	1544	江之島遷宮寄進書立
5	初代民部丞	天文 18・11・27	1549	熊野社棟札銘写
6	綱長	永禄 2	1559	(小田原衆)
7	昌治	永禄 2	1559	(本光院殿衆)
8	初代民部丞	永禄 3・11・吉	1560	熊野社棟札銘写
9	飛騨入道	永禄 4・2・5	1561	北条家奉行人連署禁制
10	綱長	永禄 4 力・3・20	1561	北条家朱印状
11	四郎左衛門	永禄 5・4・14	1562	北条家朱印状
12	四郎左衛門	永禄 6・4・26	1563	北条家朱印状
13	初代民部丞	永禄 6・11・28	1563	北条家朱印状
14	彦七郎	永禄 10・4・26	1567	北条家朱印状
15	綱長	(永禄 11 か) 1・8	1568	北条氏政書状
16	四郎左衛門	永禄 11・9・5	1568	北条氏康朱印状
17	四郎左衛門	永禄 11・10・16	1568	北条氏康朱印状
18	四郎左衛門	永禄 12・2・20	1569	北条氏康朱印状
19	四郎左衛門	永禄 12・5・9	1569	北条氏政書状写
20	四郎左衛門	永禄 12・8・29	1569	北条氏康朱印状
21	綱長	元亀元・4・9	1570	北条家朱印状写

内容・事項	出典	
奉者 南条 <b>四郎左衛門尉</b> ・幸田与三 相模西郡海蔵寺禁制	相州文書所収	戦北 1414
奉者 南条 <b>四郎左衛門尉</b> ・幸田与三 相模西郡久翁寺禁制	相州文書所収	戦北 1415
奉者 南条 <b>四郎左衛門尉</b> 相模西郡西光院御陣祈禱公物	蓮上院文書	戦北 1442
奉者 南条 <b>四郎左衛門尉</b> 深沢後詰一戦大山戦勝祈念	相州文書所収	戦北 1461
奉者 南条 <b>四郎左衛門尉</b> 蓮昌院西光院護摩壇薰受取	蓮上院文書	戦北 1515
奉者 南条 <b>四郎左衛門尉</b> 毛呂土佐守あて知行役錢宛行	新編武蔵国風土記稿所収	戦北 3827
奉者 南条四郎左衛門	高室院 北条家過去帳	小田原Ⅲ 466
同年 12・18 氏規朱印状の披露状	本光寺文書	横須賀 2510
南条 <b>右京亮</b> 前より出手伝錢 南条織部同心関主水助あて	高杉光穂氏所蔵文書	戦北 2084
南条 <b>山城入道</b> 香玉（花押） 大山寺あて鉾楯勝利祈念	相州文書所収	戦北 2104
船荷数多積儀など南条に改めて申し 付けにつき山本正次に指示	越前史料所収山本文書	戦北 4736
奉者 南条 <b>民部丞</b> 伊豆天慈院殿領安堵	修善寺文書	戦北 2861
おりとりかけ馬 一疋南条□(右) <b>京亮</b>	岡本氏古文書写	小田原Ⅲ 2161
祈念之奉行申付 南条 <b>美作守</b> ・ 石巻下野守・笠原越前守あて	善勝寺文書	戦北 3794
奉者 南条 <b>右京亮</b> 新田町売馬差し超すにつき	成簀堂古文書百三十八	戦北 3816
南条 <b>右京亮</b> をまいらせ候	保坂潤治氏所蔵文書	戦北 3839

No.		年・月・日	西暦	文書名
22	四郎左衛門	元亀元・4・26	1570	北条氏康禁制写
23	四郎左衛門	元亀元・4・26	1570	北条氏康禁制写
24	四郎左衛門	元亀元・9・17	1570	北条氏康朱印状
25	四郎左衛門	元亀2・正・13	1571	北条氏康朱印状写
26	四郎左衛門	(元亀2以前)1・8	—	北条氏康朱印状
27	四郎左衛門尉	(年月日未詳) (元亀2以前か)	—	北条家か朱印状写
28	四郎左衛門尉	元亀2・10・3	1571	(大聖寺殿供養)
29	昌治	天正元・12・11	1573	南条昌治披露状
30	綱長の嫡男 織部	天正7・6・20	1579	北条家裁許朱印状
31	綱長	(天正7)9・14	1579	北条家年寄連署書状写
32		天正8・12・17	1580	北条家朱印状写
33	2代目民部丞	天正13・9・18	1585	北条氏規朱印状
34	綱長の嫡男	(年未詳)10・29 (天正元～3)	—	北条家朱印状写
35	四郎左衛門尉か	(年未詳)4・9 (天正5～7か)	—	北条家朱印状
36	綱長の嫡男	(天正後期)9・17	—	北条家朱印状
37		(年未詳)正・1	—	北条氏政書状写

拾五貫文 同 蓑毛

以上四百五貫百五拾文

此内

三百五拾貫文 従前々致来

残而

五拾五貫百五拾文 除役

但此内卅貫六百元温水寅検地増分 重而惣次検地

之上役可被仰付者也

此外

百五拾貫文 豆州 松本郷

此内

百貫文 寄子六人給恩<sup>ニ</sup>被下

五拾貫文 知行五ヶ所夫錢役錢<sup>ニ</sup>為御合力南条<sup>ニ</sup>被下

南条綱長の知行地は、相模国西郡宮地（神奈川県湯河原町）八一貫九〇〇文、同国中郡堀三保（秦野市）二一〇貫文、同郡温水（厚木市）<sup>ぬるみず</sup>五三貫六〇〇文ほか合計四〇五貫一五〇文で、伊豆の南条郷は含まれていない。宮地は「丙寅検地辻」と永正三年（一五〇六）に検地実施のうえで初代宗瑞から宛行われた知行地であることが明記されている。「寅歳検地辻」「壬寅検地増分」と注記されている温水では、天文十一年（一五四二）に代替わり検地が実施されて三〇貫六百元が増分として認められている。

また、南条郷は、狩野川の流域氾濫原にあたり、水害に見舞われて大きな被害を受けていたことが、『役帳』小田



原衆大草加賀守の知行の注記から判明する。該当部分を以下に示す（傍線筆者）。

一 大草加賀守

貳百貳拾壹貫四百貳拾文 豆州田方 南条郷

此内五拾貫文為川流早雲寺殿殿様御代より役御免

（中略）

五拾貫四百貳拾文 従昔除役 但南条郷川成共二

南条郷は韭山城の南一・五キロメートルに位置し、同城は、伊豆に進出した初代宗瑞が本拠とした城で、後に氏規が管轄した支城である。山城守家南条氏の知行高合計四〇〇貫文余は、家臣のなかでも上位のうち『役帳』における上位三〇番代）に含まれ、しかも宮地が初代宗瑞より宛行われていたという点を考慮すると、おそらくは宗瑞の伊豆侵攻に南条氏が大きく貢献した（<sup>6</sup>）ことにより、当初は本貫地の南条郷を含んだ地域を知行地と認められて伊豆衆に属していたものの、狩野川の氾濫により南条郷が「川流」「川成」となったため、宗瑞が相模西郡を支配下に入れた段階で宮地を、さらに中郡まで進出したうえで堀三保と温水などを、南条郷に代わる知行地として宛行われ、これにより、南条氏が本拠を相模国に移し、小田原衆に属することになったと考えられる。

なお、天正年間に確認される右京亮（表1 No. 30・35）は、綱長の嫡男である。また、永祿四年に北条家奉行人連署禁制に加判している南条飛驒入道（同No. 9）は長吉と同世代とみられ、庶流であったと推測される。

（2）玄蕃助昌治

玄蕃助の後身が因幡守昌治であることは、佐脇栄智氏が、一九九八年刊行の『小田原衆所領役帳』<sup>(8)</sup>の「南条玄蕃

助」についての傍注で「南条昌治か」と記され、石塚勝氏が、二〇〇六年刊行の『戦国人名辞典』<sup>(9)</sup>南条昌治の項において、官途名玄蕃助、受領名因幡守と明示されている。

玄蕃助が属していた「本光院殿衆」は、かつての北条為昌（氏康弟、氏規の叔父）の家臣団の一部（三浦衆）で、天文十一年（一五四二）の為昌死去後も解体されずに、氏康が管轄し、永禄七年までに駿河から帰国した氏規が継承した<sup>(10)</sup>。玄蕃助の知行高は一三三貫三八〇文と、右京亮綱長と比較して六分の一と少ないが、亡くなった為昌の軍団を氏康が管轄するなかで、玄蕃助には、かつての為昌の家臣が寄子として多く付せられていた。『役帳』に見える南条の寄子としては、八名が挙げられている。

- ・ 矢野彦六      武州神奈川    一〇〇貫文
- ・ 杉山彦五郎    伊豆原木内    五七貫文
- ・ 伊藤与九郎    林    三〇貫文
- ・ 幸田源左衛門    入不斗<sup>いりやまず</sup>    三〇貫一六三文
- ・ 近藤孫三郎    甘沼    一八貫文
- ・ 佐野籐左衛門    奈古谷内    二三貫六百元
- ・ 行谷藤五郎    行谷一宮内    一七貫四〇〇文
- ・ 窪孫兵衛    矢作    三二貫一五〇文

この八名の寄子給合計は三〇八貫三一一三文で、玄蕃助の知行高と合わせると右京亮綱長の知行に並ぶものとなり、分家の玄蕃助も、本家と同等の軍役を負担していたといえることができる。

従来述べられているように、永禄八年以降に北条氏規の家老をつとめた南条昌治の実名が為昌の偏諱である点、為昌の旧臣の多くが玄蕃助の寄子として再編成されている点を考え合わせると、石塚氏が指摘するとおり、昌治がはじ

め玄蕃助を称して為昌に仕え、のちに氏規の家老となるにあたって因幡守を称するようになったと理解できる。

昌治については、次節で詳述するが、実名が為昌の偏諱であることから、為昌死去の天文十一年までには元服して、玄蕃助を称していた天文年間後半から永禄初年に二〇代後半―三〇代であったと推測される。

以上の点から南条氏は、宗瑞の伊豆侵攻に功績のあった長吉のとき、本貫地の伊豆南条郷の水害を契機に伊豆を離れて相州に本拠を移し、長吉の後継者（綱長の父）が北条氏綱に重用され、本家である山城守家の綱長が小田原衆として氏康に仕え、綱長の弟とみられる昌治が為昌に仕えることとなり分家したことで、『役帳』に小田原衆の綱長とは別に昌治の知行が把握されたと捉えられる。綱長・昌治兄弟は、世代的には氏康の一〇歳くらい年下であったとみられる。

### （3）民部丞

山城守家の右京亮綱長、その分家の玄蕃助昌治のほか、天文年間（一五三二―一五五五）には、相州吉浜谷本村（神奈川県湯河原町吉浜）の熊野社棟札銘に「大壇那南条殿」（表1 No.5）が確認される。吉浜谷本村の大壇那は、永禄三年（一五六〇）の同社棟札銘に「南条民部承殿」と確認され（同No.8）、それは天文十八年から十一年後のことなので、両者は同一人とみなすことができる。実名については確認できない。

吉浜は、南条綱長の知行地である相模国西郡宮地（神奈川県湯河原町宮上・宮下）<sup>(11)</sup>から東方向に約三・五キロメートルにあたり、その位置関係から民部丞は、山城守家知行地である宮地近郷の吉浜に所領をもつ一族、あるいは吉浜の有力者で地縁による姻戚関係で南条氏を名乗るようになった、いずれかが考えられるであろう。民部丞の動向が確認できるのは、天文十八年から永禄六年であることから、綱長・昌治と同世代とみられる。永禄六年に伊豆修善寺の

番匠公方役について免除する北条家朱印状の奉者を務めている（表1 No.13）。この点から、ここでは、山城守家の庶流と捉えておきたい。

民部丞は、天正十三年（一五八五）に北条氏規朱印状の奉者としても登場している（同 No.33）。北条家朱印状奉者を務めている永禄六年から二二年後のことであり、この間世代交代があり、氏規朱印状奉者の民部丞は二代目で、北条家朱印状奉者民部丞の後継者の可能性が高い。御一家衆の政権確立期に本城家臣から御一家衆の家臣、しかも筆頭家老となった事例はあるが、天正十三年段階で、氏規家臣に本城から迎えられる必要はないと考えられ、民部丞が代替わりする際に、本城家臣から氏規家臣に替わったと考えられる。そうであるとすると二代目民部丞は、初代民部丞の嫡男ではなく昌治の息子の一人で氏規の家臣であったが、民部丞の後継者がなかったことから一族（叔父か）の民部丞家を継承したとも考えられであろう。

#### （4）四郎左衛門尉

南条四郎左衛門尉は、永禄五・六年の北条家朱印状奉者（表1 No.11・12）として登場し、永禄十二年から元龜二年まで七点の氏康朱印状奉者（同 No.18・20・22・26）を務めている氏康側近の一人であった。実名は不明で、氏康の死去後は、高野山高室院に氏康供養の霊牌を奉じている（同 No.28）。その後の動向は不明であるが、年未詳（天正五・七年）<sup>13</sup>四月九日付北条家朱印状で、石巻下野守康保・笠原越前守康明とともに「祈念之奉行」を命じられている南条美作守（同 No.35）が、四郎左衛門尉の後身であると考えられる。

活動の時期からは、綱長・昌治と同世代で、一〇歳ほど年下とみられる。綱長・昌治の弟、あるいは飛驒入道（同 No.9）の子息の可能性があるが、四郎左衛門尉の官途名は、南条氏一族のなかでは趣が異なり、他家からの養子ある

いは女婿で南条氏を称したとも推測される。

## 二 因幡守昌治について

### (1) これまでの南条因幡守についての研究

まず、南条因幡守昌治については、黒田基樹氏<sup>(14)</sup>が論じられており、その見解を要約すると、次に挙げる五点である。

①南条因幡守の奉書は、永祿八年（一五六五）正月から天正十一年（一五八三）七月まで見られる。  
②昌治は北条為昌から偏諱を受けた為昌の旧臣で、氏規が為昌の菩提者としての立場を継承した際、<sup>(15)</sup>家臣として付された。

③昌治は、三崎城下の法満寺屋敷に陣屋を構え、氏規に代わって三崎城に在城していた。

④天正十一年までの氏規朱印状の大部分を奉じていることから、その立場は家老とみなされ、氏照における横地吉信、氏邦における三山綱定に相当する。

⑤昌治は天正十一年七月以降史料上に確認できないため、引退したとみられる。  
これに加えて、石塚勝氏<sup>(16)</sup>は、次の三点を指摘している。

⑥受領名因幡守を名乗る以前に、官途名玄蕃助を称していた。

⑦事績の初見は、天文十三年と推定される相模江の島弁財天の遷宮に際し、玄蕃助として布施五百文を奉加している文書である。

⑧天正十一年、氏規を施主として桂林院殿（氏康娘・武田勝頼室）の霊位を奉ずるなど、氏規から高野山高室院への窓口役であった。

さらに、『横須賀市史 通史編』では、簡潔に次のように述べられているので、該当部分を確認したい（根拠とする『横須賀市史 資料編』の資料番号等は省略）。

南条昌治は、玄蕃助・因幡守とみえ、元来伊豆を本貫としていたものと思われるが、『役帳』作成段階においては、和田開文（三浦市）のみがその知行としてあげられていることから、当時はここを本領としていたのであろう。さらに『役帳』によれば、不入斗（横須賀市不入斗町）も知行をもつ幸田源左衛門や柏原（逗子市）の石上弥太郎など八人が昌治の寄子となっている。北条為昌の旧臣であったが、その後氏規家臣となり、永禄一〇年二月の氏規の三浦郡支配に関わる初見史料では奉者をつとめている。また元龜三年（一五七二）九月には、三崎宝満寺の屋敷が昌治の陣屋として使用されており、三崎に常駐していたものと思われる。昌治は氏規の筆頭家老的立場にあり、その後も氏規に仕えて活躍したが、慶長五年（一六〇〇）二月に氏規が没した際には、北条氏の牌所高野山高室院に対して氏規の菩提料や石塔につき沙汰したのは昌治であり、終生氏規の家老的立場にあったことがわかる。

以上のように、これまでの研究によって、南条昌治については言い尽くされている感もあるが、あらためて、関係文書を確認し、南条氏一族の動向と合わせて、いくつかの点を指摘したい。

## （2）南条因幡守関係文書

まず、北条氏規朱印状に登場する奉者について、あらためて【表2 北条氏規朱印状の奉者】を確認したい。

表2 北条氏規朱印状の奉者

No.	年・月・日	奉者	出典
1	永禄8・1・28	南条因幡守(昌治)	戦北八九一
2	(永禄10) 2・11	南条因幡守	戦北一〇〇九
3	永禄10・3・25	南条因幡守	戦北一〇一四
4	永禄10・10・12	南条因幡守	横須賀二四六一
5	(永禄11) 12・15	朝比奈甚内(泰寄)	戦北一二二二
6	(永禄11) 12・18	岡部和泉守	戦北一二二四
7	(永禄13) 2・12	朝比奈甚内	戦北四六八六
8	元亀3・①・16	南条因幡守	戦北一五七八
9	元亀3・9・15	南条因幡守	戦北一六一三
10	(天正元) 2・23	南条因幡守	戦北一六三四
11	(天正元) 12・18	南条因幡守	横須賀二五〇九
12	(天正4) 3・28	朝比奈石衛門尉(泰之)	戦北四〇〇七
13	(天正5) 4・6	朝比奈石兵衛尉(泰寄)	戦北四七二一
14	(天正5) 4・27	長谷川九郎左衛門尉	戦北一九〇六
15	(天正11) 7・1	山中上野介(康豊)	戦北二五五二
16	(天正11) 7・13	南条因幡守	戦北二五五六

17	（天正11） 12・24	朝比奈右衛門尉	戦北四〇〇八
18	（天正13） 4・3	朝比奈右衛門尉 井出内匠助	戦北四七五五
19	天正13・9・18	南条民部丞	戦北二八六一
20	（天正13） 12・13	井出内匠助	戦北二九〇〇
21	（天正15） 4・13	井出内匠助	戦北三〇八一
22	（天正16） ⑤・晦	朝比奈右衛門尉 井出内匠助	戦北四七六四
23	（天正17） 4・24	朝比奈右兵衛尉	戦北二二〇一
24	（天正18） 1・4	長谷川	戦北三六〇一
25	（天正18） 1・5	佐野内膳亮	戦北三六〇六

氏規朱印状の奉者を確認してみると、その三分の一（二五点のうち九点）が南条因幡守が務めるもので、南条因幡守以外の奉者は、朝比奈泰之・朝比奈泰寄・井出内匠助が四点のほか一・二点に確認される者が五人で、いずれも天正年間（一五七三～一五九一）後期が中心である。天正元年までの氏規政権確立期<sup>(17)</sup>（二〇年間）に限ってみると、昌治が七割（十一点のうち八点）、そのうち永祿十一年十二月駿河出陣中の制札二点（表2 No.5・6）を特例<sup>(18)</sup>とみれば、氏規政権確立期において、昌治がほぼ九割を占めるといえる。

この点より、昌治が為昌の旧臣の中から、為昌の後継となる氏規の筆頭家老として選ばれ、氏規の政権確立に奔走したことが確認できる。こうした昌治の動向を検討するため、【表3 南条因幡守関係文書】に関係文書を確認したい。



## (3) 南条昌治と嫡男因幡守

昌治は、為昌死去の天文十一年（一五四二）までには元服していて、官途名の玄蕃助で見える永祿二年（一五五九）には三〇歳を越え、同七年の氏規帰国時には、因幡守を称していて四〇歳に近かったと推定される。氏康の一〇歳くらい年下で、氏規より二〇歳ほど年長であったとみられる。天正後期に氏規の奉者として活躍する朝比奈泰之・泰寄は、氏規と同世代なので、当然、昌治が若い彼らを指導する立場であったはずである。

天正後期に朝比奈泰之・泰寄、井出内匠助ら奉者が多くなったのは、氏規政権における家臣の世代交代が<sup>(19)</sup>あったと考えられる。天正後期に昌治は六〇歳に近くなっていたと推測され、すでに四〇代になっている朝比奈泰之らが氏規政権の中樞を担っていたといえよう。

これまで、実績が確認できなくなる天正十一年以降、昌治は引退したと考えられきたが、ここで問題としたいのは、天正元年十二月十八日（表2 No.11）の後、天正十一年七月十三日（同No.16）までに一〇年が経ている点である。

朝比奈泰之が六郎大夫から右衛門尉に改めるのは、天正二年閏十一月から同四年三月の間、泰寄が甚内から右兵衛尉に改めるのは同五年四月以前で、<sup>(20)</sup>おそらく、それは氏規の官途名左馬助への改めに伴うものと考えられる。これと同時に、氏規を支える家臣も、宿老昌治が隠退し、世代交代がはかられたと理解できる。

そうすると、天正十一年七月に氏規朱印状の奉者を務めている南条因幡守（表2 No.16）は、昌治の嫡男、二代目因幡守となる。

同じく、河内狭山藩家老朝比奈家に伝来した北条氏規書状写に朝比奈与兵衛（泰之嫡男の泰澄）・井出内匠助とともに登場する南条因幡守は、昌治の嫡男とみなされる。実名は不明。昌治嫡男の二代目因幡守は、昌治の二〇代前半

表3 南条因幡守関係文書

No	年・月・日	西暦	文書名	内容・事項	出典	
1	天文13・㉑・23	1544	江之島還宮寄進書立	御ふせ五十疋 南条玄蕃助殿	岩本院文書	横須賀 2343
2	永禄2	1559	(本光院殿衆)	66貫380文 南条玄蕃助 三浦和田開分	小田原衆所領役帳	役帳 175頁
3	永禄8・1・28	1565	北条氏規朱印状写	奉者 南条因幡守 伊豆奥手石郷田畠二貫文永代宛行	伊豆順行記	戦北 891
4	永禄10・2・11	1567	北条氏規朱印状	奉者 南条因幡守 永嶋助右衛門あて 葛網仰付、網之魚下付	永嶋文書	戦北 1009
5	永禄10・3・25	1567	北条氏規朱印状	奉者 南条因幡守 田津舟持助右衛門あて 葛網船諸役免除	永嶋文書	戦北 1014
6	永禄10・10・12	1567	北条氏規朱印状	奉者 南条因幡守 毎年定施餼鬼銭并御霊供米銭五貫文書出	本光寺文書	横須賀 2461
7	元亀3・㉑・16	1572	北条氏規朱印状	奉者 南条因幡守 天叢院殿霊供銭・施餼鬼銭ほか宛行	修善寺文書	戦北 1578
8	元亀3・9・15	1572	北条氏規朱印状	奉者 南条因幡守 三崎法満寺之屋敷、南条因幡守陣屋之儀	円照寺文書	戦北 1613
9	天正元・2・23	1573	北条氏規朱印状	奉者 南条因幡守 葛網当年之儀について仰付	永嶋文書	戦北 1634

10	天正元・12・11	1573	南条昌治披露状	No.11 氏規朱印状の披露状	本光寺文書	横須賀 2510
11	天正元・12・18	1573	北条氏規朱印状	奉者 南条因幡守 本光寺殿御靈供錢并施餼鬼錢五貫文進納	本光寺文書	横須賀 2509
12	(天正4以前)8・5	～1574	朝比奈泰之書状写	南条因幡守在陣のあいだ泰之委曲申達候	集古文書七十六	戦北 4060
13	(天正前期) 8・5	—	北条氏規書状写	委曲南条因幡守申すべき条省略せしめ候	集古文書七十三	戦北 4021
14	年未詳・卯・25	—	南条昌治書状	氏規へ御状并阿種御音信につき御返事	高室院文書	戦北 4195
15	年未詳・12・5	—	本光寺宗知書状写	南条因幡守宛 土肥郷天寿院のこ と	相州文書所収 保善院 所蔵	戦北 4575
16	天正 11・7・13	1583	北条氏規朱印状	奉者 南条因幡守 桂林院殿(武田勝頼室)石塔日牌料 の進納	高室院文書	戦北 2556
17	天正 11・7・13	1583	(桂林院殿供養)	奉者 南条因幡守	高室院 北条家過去帳	横須賀 2611
18	文禄 4・10・27	1595	京大坂御道者職日記	一匁一斗二升 南条因幡守	御師関係文書断簡四	埼玉 参 28
19	(慶長5以前) 1・4	～1600	北条氏規書状写	南条因幡守・朝比奈与兵衛・井出 内匠助宛 六月我々大坂帰るべく、秋御迎え につき	田緒備細書	狭山朝比奈文書
20	慶長 5・2・8	1600	(一睡院殿供養)	奉者 南条因幡守	高室院 北条家過去帳	横須賀 2780

に誕生していたとするならば、氏規と同じ頃の生まれで、天正四年頃の昌治からの世代交代のときに三〇代前半、同十八年の小田原退去のときには四〇代半ばになっていたとみられる。

なお、つぎに示す狭山藩家老朝比奈家に伝来した「系図」<sup>(22)</sup>により、昌治の法名が一行で、娘が朝比奈泰之の妻となっていたことが分かる。

#### 中興之祖

朝比奈右衛門泰栄―与兵衛泰澄―右衛門泰俊―頼母精泰―弥兵衛泰繼―頼母泰亮―弥兵衛泰憲―(二代略)  
妻南条因幡守一行女

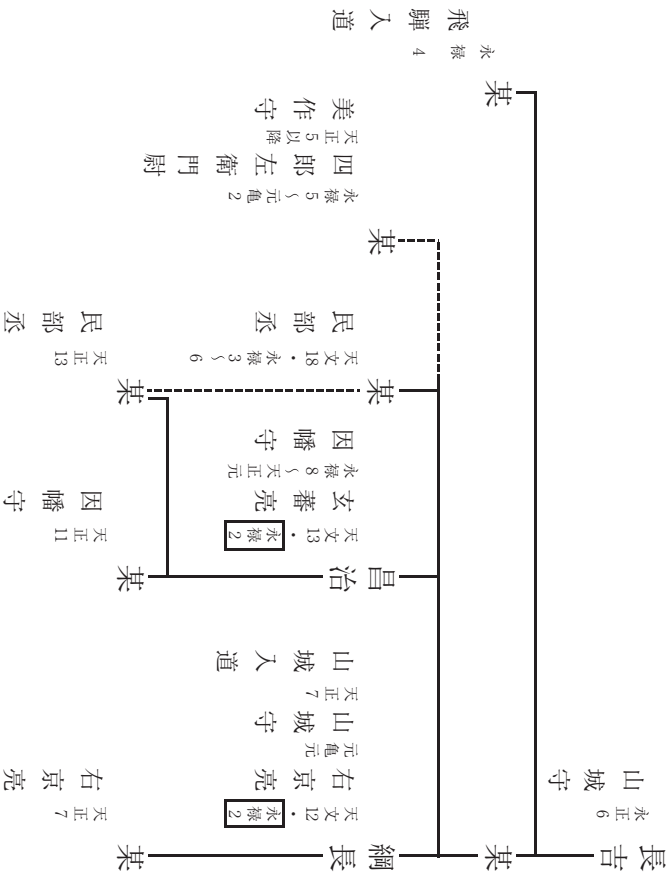
この系図は、一八世紀半ばに、狭山藩家老朝比奈家の泰憲の頃に作成されたと考えられるが、先祖についての信憑性の高い伝承と評価できる。初代右衛門尉泰之の妻、二代泰澄の母が、朝比奈氏と同じく小田原時代から氏規に仕えていた南条家から嫁いできた女性であったということは、狭山朝比奈家の重要な伝承の一つであったため、わざわざ注記したものと理解される。

南条昌治の娘と朝比奈泰之との婚姻は、氏規の相模帰国に従って駿河から小田原入りした泰之を、筆頭家老昌治の婿とすることで、氏規の政治基盤を確固たるものにしようとする小田原本城の意向による縁組みとみられる。

#### むすびにかえて

以上、北条家臣南条氏についての論述をもとに、その系譜を考察すると、つぎに示す関係系図のようになる。

永	1504
正	
大永	1521
享祿	
天文	1532
弘治	
永	1558
祿	
元龜	1573
天正	



南条氏関係系図

関係資料が限られているため、推測の域を出ない部分も多いが、今後の研究進展の素材として提示しておきたい。

# 註

- (1) 黒田基樹「北条氏規の文書について」(『日本歴史』五一四号、一九九一年、のち「北条氏規文書の考察」と改題して同著『戦国大名領国の支配構造』、岩田書院、一九九七年、に再録)。
- (2) 『戦国人名辞典』(吉川弘文館、二〇〇六年)。
- (3) 『新横須賀市史 通史編』六三八・六三九頁(二〇一二年)。
- (4) 一九六〇年代に、南条玄蕃についての論争(『横須賀市博物館研究報告』九・一〇・一一)が展開されたことがあったが、その材料となる「玄蕃」「南条」の文言については、読み誤りであることが確認されている。
- (5) 表1 No.3伊豆大宮神社の棟札銘には「綱良」と見えるが、実名を「綱長」と判断する点は、黒田基樹氏のご教示による。その根拠は、先代が「長吉」(表1 No.1)であることから通字が「長」と判断されること、「良」は「長」の誤記の場合が多いこと、「良」は人名読みで「なが」と読むことである。
- (6) 天文十一年代替わり検地の増分三〇貫六匁文を除いた三七四貫五五〇文の知行高でも、『役帳』における上位五〇番代に含まれる。
- (7) 『役帳』南条右京亮知行において、豆州松本一五〇貫文のうち、一〇〇貫文は寄子六人への給恩、五〇貫文は「為御合力南条二被下」と明記されている。寄子六人とともに勲功による宛行がなされ、南条が御合力したと記されている点は、南条氏が一族・寄子とともに、北条氏の伊豆侵攻に大きく貢献したことを窺わせるものである。
- (8) 佐脇栄智校注『小田原衆所領役帳 戦国遺文後北条氏編別巻』(東京堂出版、一九九八年)。
- (9) 前掲注(2)に同じ。
- (10) 本光院殿衆については、湯山学「本光院殿衆知行方」考―北条為昌の家臣団構成とその所領―(『歴史研究』二三四号、一九八〇年、のち同著『三浦氏・後北条氏の研究(湯山学中世史論集2)』、岩田書院、二〇〇九年再録)をはじめとして、多くの研究蓄積がある。詳細は、拙編著『玉縄北条氏(論集 戦国大名と国衆9)』(岩田書院、二〇一二年)の「解説」および「玉縄北条氏関係文獻目録」を参照されたい。

- (11) 現地名として宮地は確認されないが、杉山博校訂『小田原衆所領役帳』（近藤出版、一九六九年）の校注において足柄下郡の宮上・宮下に推定されている。
- (12) 氏照家臣の横地吉信・布施兵庫大夫、氏邦家臣の三山綱定、本稿で取り上げる氏規家臣の南条昌治が該当する。
- (13) 石巻下野守は康保に比定され、その終見が天正七年、笠原康明が越前守を称するのが天正五年以降であることから、この間の天正五・七年と推定される。
- (14) 前掲注（1）に同じ。
- (15) 氏規が為昌の菩提者となるまでについては、拙稿「天文・永禄期の北条氏規について——本光院殿菩提者となるまで——」（『駒沢史学』九〇号、二〇一八年）を参照されたい。
- (16) 前掲注（2）に同じ。
- (17) 駿河今川氏の御一家衆となっていた氏規が、解消して相模に戻った時期は永禄七年六月の直前とみられる（前掲注15拙稿）。
- (18) この制札二点は、武田信玄の駿河侵攻に対する出陣にあたって、かつて今川家中であった朝比奈泰寄と岡部和泉守を奉者として、氏規軍に加勢衆として加わっている今川家中の「濫妨狼藉」を禁じたものと解釈できる（拙稿「北条氏規家臣朝比奈氏について」（戦国史研究会編『戦国期政治史論集 東国編』、岩田書院、二〇一七年）。
- (19) 氏規の兄弟の場合、氏照の筆頭家老は老横地吉信・布施兵庫大夫から元亀元年狩野宗円に交代（拙稿「小田原北条氏と織田・徳川氏——取次北条氏照と笠原康明を中心に——」、橋詰茂編『戦国・近世初期 西と東の地域社会』、岩田書院、二〇一九年）、氏邦の筆頭家老三山定綱は元亀二年に隠退（拙稿「北条氏邦の鉢形領支配」、『後北条領国の地域的展開』、岩田書院、一九九七年。初出は一九八八年）している。
- (20) 前掲注18拙稿。
- (21) 年末詳正月四日付北条氏規書状写（小西平八郎氏収集朝比奈文書）。全文を左にあげる。  
「朝比奈・井出両家之儀、御譜代之内格別二被 召仕候、古證文ハ小田原御落居以後 氏規公御書之内二何々と申御文言有之、略之候、」  
扱六月者我々ハ大坂江可帰、此秋御迎ハ可進候、八幡大菩薩・愛岩御照覧偽ニ無之候、為其如此候、恐々謹言、  
正月四日 氏規御判

南条因幡守殿

朝比奈与兵衛殿

井出内匠助殿

(22) この「系図」および前掲注(21)の氏規書状写を含む狭山藩家老朝比奈家伝来文書は、昭和四十年代以降、文書群ごと所在不明と

なっているが、一九六〇年に狭山町史編纂委員会が大阪市の小西邸で撮影した画像により、小西平八郎氏収集文書として確認され、現在はネガフィルムを大阪狭山市教育委員会が保管している。

なお、系図には右衛門尉の実名が泰栄となっているが、関係文書に見える泰之が同じよみ「やすひで」のため、その読みのみが子孫に伝来して「栄」の字が当てられたと想定できる(前掲注18拙稿)。

(補注) 表1・表2・表3の典拠欄について、戦北は『戦国遺文 後北条氏編』(東京堂出版)、横須賀は『横須賀市史 資料編』、役帳は

『小田原衆所領役帳 戦国遺文後北条氏編別巻』(東京堂出版)、小田原は『小田原市史 史料編中世』、埼玉は『埼玉県史料叢書』

一二巻である。